

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録（2014.12）平成25年度:14-17.

きょうだい面会がNICU退院後の受け入れに及ぼす影響

岩井 恵美, 本村 あゆ美, 武田 知美, 佐々木 弥奈

きょうだい面会がNICU退院後の受け入れに及ぼす影響

旭川医科大学病院 岩井 恵美、本村あゆ美、武田 知美、佐々木弥奈

研究目的

NICUに長期入院を余儀なくされている児のきょうだいに對し、直接児に触れ合えるきょうだい面会を行う事が、退院後の児の受け入れにどのように影響を及ぼすのか明らかにする。

用語の定義

窓越し面会：NICUの窓からNICU内の児と面会する事。きょうだい面会：直接患児に触れ合う面会をする事。

研究方法

NICU入院中にきょうだい面会を行った児の母親2名に半構成的面接を行った。面接で得られた逐語録から、テーマについて語られている文脈を抽出し一意味をコードとした。コード化したデータは類似性・相違性に基づいてサブカテゴリー化・カテゴリー化した。データ収集期間は平成25年2月～3月であった。尚、本研究は、施設内の倫理委員会の承認を受け実施した。対象者には研究の趣旨、公表方法及び個人情報保護の方法などを説明し書面にて同意を得た。

結果

1. 事例紹介： A氏の第2子は7ヶ月間NICUに入院しており、第1子の年齢は7歳であった。窓越し面会は7回、きょうだい面会は3回実施した。 B氏の第2子は14ヶ月間NICUに入院しており、第1子の年齢は3歳であった。窓越し面会は9回、きょうだい面会は1回実施した。

2. 面接内容： 分析の結果、6のカテゴリー（以下《》で表記）と13のサブカテゴリー（以下〈〉で表記）が見出された。

《面会に対する母の葛藤》は、〈面会の安全性への母の懸念〉〈触れ合いに対する母の希望〉で構成された。《きょうだいに対する母の説明と配慮》は、〈きょうだいに対する母の配慮〉〈面会についてのきょうだいへの説明〉で構成された。

《面会を楽しみにするきょうだいの気持ち》は、〈面会を楽しみにするきょうだいの気持ち〉で構成された。《触れ合いで得るきょうだいの実感》は、〈触れ合えないこ

とできょうだいの実感がない〉〈面会直後のごちなさ〉〈触れ合いによるきょうだいの実感〉で構成された。《きょうだい触れ合うことによる効果》は、〈退院を待ち焦がれる姉の気持ち〉〈退院前からの関係づくりになる〉〈きょうだい触れ合うことでのメリット〉〈きょうだいのモチベーションの維持〉で構成された。《退院後の積極的なお世話》は、〈退院後の積極的なお世話〉で構成された。

考察

NICUに入院している児の母親はきょうだい面会に對し、〈面会の安全性への母の懸念〉はあるが、〈触れ合いに対する母の希望〉を持っていた。母親は、児ときょうだいを触れ合わせる前には、きょうだいが児を受け入れられるようなくきょうだいに対する母の配慮〉をしており、面会の制限に對しても納得できる〈面会についてのきょうだいへの説明〉を行っていた。この《きょうだいに対する母の説明と配慮》が《面会を楽しみにするきょうだいの気持ち》へ繋がったと考える。

きょうだい面会前にきょうだいは窓越し面会をしていても〈触れ合えないことできょうだいの実感がない〉状態であった。面会時には〈面会直後のごちなさ〉があったが、〈触れ合いによるきょうだいの実感〉が出来ていた。きょうだい面会時のきょうだいの反応から、母は〈きょうだい触れ合うことでのメリット〉や〈退院前からの関係づくりになる〉と感じていた。実際に〈きょうだいのモチベーションの維持〉〈退院を待ち焦がれるきょうだいの気持ち〉が生じており、退院前からの関係作りが《退院後の積極的なお世話》に繋がったと考える。この事から、退院後の児の受け入れに良い影響を及ぼしていると言える。

結論

1. NICUに長期入院を余儀なくされる児の母親は、きょうだい触れ合うことのできる面会を望んでいたが、面会の安全性への懸念を抱いていた。
2. きょうだいは、児と直接触れ合うことで児の存在を実感出来ていた。
3. きょうだいが児の存在を実感することは、退院前か

らの関係作りに繋がっていた。

4. 退院前から関係作りが出来ていたことで、きょうだいは退院後、積極的に兄のお世話をすることが出来ていた。

きょうだい面会が患児のきょうだいの受け入れに及ぼす影響

旭川医科大学病院

岩井恵美 本村あゆ美 武田知美 佐々木弥奈

研究目的

きょうだい面会を行うことが、退院後の児の受け入れにどのように影響を及ぼすのかを明らかにする。

用語の定義

- 窓越し面会：NICUの窓からNICU内の児と面会すること
- きょうだい面会：直接患児に触れ合う面会をすること

研究方法

- 対象者：入院中にきょうだい面会を行った児の母親2名
- データ収集方法：半構成的面接法
- データ分析方法：逐語録から、テーマについて語られている文脈を抽出し一意味をコードとした。コード化したデータは類似性・相違性に基づいてサブカテゴリー化・カテゴリー化した。
- 倫理的配慮：研究内容と目的、個人情報保護、公表等について説明し同意を得た。

結果①

事例紹介



対象者	子どもの入院期間	きょうだいの年齢	窓越し面会回数	きょうだい面会回数	インタビュー時期
A氏	7か月	7歳	7回	3回	退院4か月後
B氏	14か月	3歳	9回	1回	退院1年4か月後

結果②

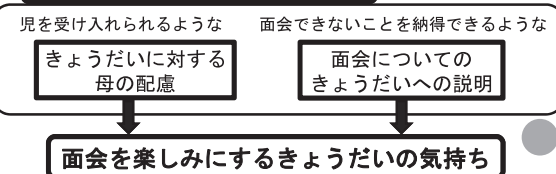
カテゴリー (6)	サブカテゴリー (13)
面会に対する母の葛藤	面会の安全性への母の懸念 触れ合いに対する母の希望
きょうだいに対する母の説明と配慮	きょうだいに対する母の配慮 面会についてのきょうだいへの説明
面会を楽しみにするきょうだいの気持ち	面会を楽しみにするきょうだいの気持ち
触れ合いで得るきょうだいの実感	触れ合えないことできょうだいの実感が無い 面会直後のぎこちなさ 触れ合いによるきょうだいの実感
きょうだいに触れ合うことによる効果	退院を待ち焦がれる姉の気持ち 退院前からの関係づくりになる きょうだいに触れ合うことでのメリット きょうだいのモチベーションの維持
退院後の積極的なお世話	退院後の積極的なお世話

考察①

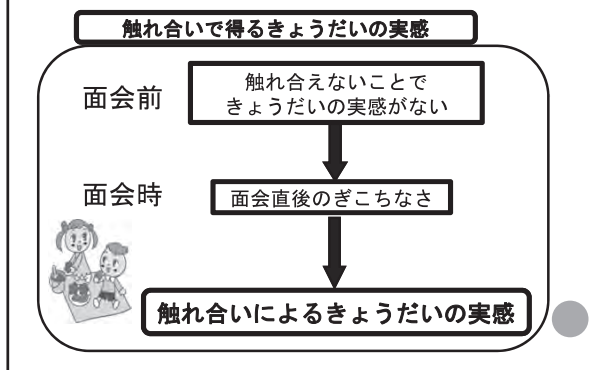
きょうだい面会に対する母の葛藤



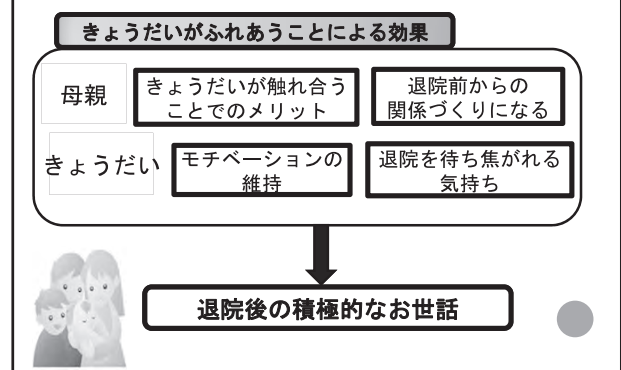
きょうだいに対する母の説明と配慮



考察②



考察③



結論

1. NICUに長期入院を余儀なくされる児の母親は、きょうだいが流れ合うことのできる面会を望んでいたが、面会の安全性への懸念を抱いていた。
2. きょうだいは、児と直接流れ合うことで児の存在を実感出来ていた。
3. きょうだいが児の存在を実感することは、退院前からの関係作りに繋がっていた。
4. 退院前から関係作りが出来ていたことで、きょうだいは退院後、積極的に児のお世話をする事が出来ていた。